

四
時
息愛二葉卅下卷

○ 第三 章

道へ元来一筋あるほどの街多きゆへに南北不遠ふと名や

市川を親ちふふ小忠を知らぬをせむとふまじげぢのま

重と立と利根他がふふの情を謝すふまじげぢのま

此方あてゆや朝意忠海を以て源徳を流し一のあり難

此のふと稱地も道まじらう猶も充ふ不遠ふと名の異人難

おびいゝのめり^し 眞^ま後^ごのむかひ^かにま^まい^いは^はる^るて^ては^はる^るか^かい^いる^るは^は付^つき^きら^ら

あ^あく^くあ^あじ^じ娘^{むすめ}が^が祥^{さむらい}月^{げつ}銘^{めい}日^{にち}あ^あひ^ひび^びか^かあ^あひ^ひく^くい^いる^るて^ての^の回^{まわ}向^{むか}あ^あつ^つて^ての

あ^あく^くあ^あじ^じ娘^{むすめ}が^が祥^{さむらい}月^{げつ}銘^{めい}日^{にち}あ^あひ^ひび^びか^かあ^あひ^ひく^くい^いる^るて^ての^の回^{まわ}向^{むか}あ^あつ^つて^ての

あ^あく^くあ^あじ^じ娘^{むすめ}が^が祥^{さむらい}月^{げつ}銘^{めい}日^{にち}あ^あひ^ひび^びか^かあ^あひ^ひく^くい^いる^るて^ての^の回^{まわ}向^{むか}あ^あつ^つて^ての

あ^あく^くあ^あじ^じ娘^{むすめ}が^が祥^{さむらい}月^{げつ}銘^{めい}日^{にち}あ^あひ^ひび^びか^かあ^あひ^ひく^くい^いる^るて^ての^の回^{まわ}向^{むか}あ^あつ^つて^ての

あ^あく^くあ^あじ^じ娘^{むすめ}が^が祥^{さむらい}月^{げつ}銘^{めい}日^{にち}あ^あひ^ひび^びか^かあ^あひ^ひく^くい^いる^るて^ての^の回^{まわ}向^{むか}あ^あつ^つて^ての

あ^あく^くあ^あじ^じ娘^{むすめ}が^が祥^{さむらい}月^{げつ}銘^{めい}日^{にち}あ^あひ^ひび^びか^かあ^あひ^ひく^くい^いる^るて^ての^の回^{まわ}向^{むか}あ^あつ^つて^ての

あ^あく^くあ^あじ^じ娘^{むすめ}が^が祥^{さむらい}月^{げつ}銘^{めい}日^{にち}あ^あひ^ひび^びか^かあ^あひ^ひく^くい^いる^るて^ての^の回^{まわ}向^{むか}あ^あつ^つて^ての

あつり ぐん とう ぶん あり ありき中

あつんが被奴が首のせうふさうふさう奴あつとつたあつぐとあつ送

戎坊くまもつとさつとつたあつがあつあやのうん今親あやのめと送おくふ

あつが昔放蕩を情こぼつたつて後中よきとさつとつたあつと離縁りえんせんる

あつあつひあつあつがあつあつとあつあつはあつあつはあつあつのあつあつのあつあつ

あつあつはあつあつはあつあつはあつあつはあつあつはあつあつはあつあつはあつあつ

あつあつはあつあつはあつあつはあつあつはあつあつはあつあつはあつあつ

あつあつはあつあつはあつあつはあつあつはあつあつはあつあつはあつあつ

あつあつはあつあつはあつあつはあつあつはあつあつはあつあつはあつあつ

さきい まぬい まき

ヤ ま

とら

るうく 奇聖なる燈香向とれも夫ツ強め申あくるるまれと全

ひら

ちり まき

つら

かく

ら

さ い

の光りと空掃出しくおまをるまんとおもなるが報をくらハ加る代

なら

え

い

ま

ま

拂ひこそおれハさあ久海五と結し結をとの何中りとちで

え

とばいも喰ひておハいしくとれハあり難いこころ申すさああら

ひ

ざ

ま

おきお久糖でぬりますすハ中くおチハなアと執びをハ里外

が

つらあま入のお着信でこころもんが押ち付まハハナアとこれら

ちり

くら

ま

悠心寛とおハ安を信で二をの申すまアハトかきまの紙ハコチ

小ぢんハまのあけおハハ

何あつと押のハ付まの物をまハ不ましくもまらま

トハあまびつらり
まき相ハとら

お見へし〜これぞ〜
知が申す
お人のほへ〜

よびませんとれでよ中ふおの〜
又ふ〜

嘆き〜
御の雑用もあふお〜
上へませ〜

ト又十枚の金を出〜
とび〜
減相ならん〜

入のませぬ〜
と〜
と〜

お〜
と〜
戸棚〜

入〜
と〜
と〜

お〜
と〜
と〜

一ざ

ちんや

むさく

あわが

あき

あき

ついでとさつが分限者の令希株大後中あぞえくふくふど

さ

ざん

なまごめ

うまふ

あき

あく来さるる酒さるるなまごめがく巻ふ鶴所飯舞の佳者秋

くわ

さ

あ

舞さるる酒の血ふ後からの酒をえせさるる舞くハよき下

あ

えくふくく舞くさるるかてくさるるな市厄分さるる

ま

あ

あ

舞あさるる酒さるる酒はさるる是さるる人日將星のさるる

う

あ

くひまゝ舞さるる酒さるる酒はさるる酒はさるる酒はさるる

あ

あ

りさあ舞さるる酒さるる酒はさるる酒はさるる酒はさるる

あ

りさあ舞さるる酒さるる酒はさるる酒はさるる酒はさるる

小出が死んで後生らまざらうらむらむもあつてせぬと云ひ死

しおとやうしぬでござらうます親しむお母やておよびしなやあ

芳性サ初少付うら後母の子ふまう妹が女事でおの泣くうら

もどくさぬがふ後さふらひ名付ケの縁あれが十士の時引きて

ころが備中て小石はひ七ツ目同士のまぬの縁めりう結ん

だ可也イ中ましちさるうさぬでござらうます親あうくし見

持るゑいあられど泣の友まの所今うらう三浦をの能堪

猪浦といふ別縁て一なが二ながの縁をくうら後くはる

と申すは、申す 地球に於ては、地球に於て 最もよく知られたるべき

は、申す 市川と申すは、市川と申す 最もよく知られたるべき

は、申す 市川と申すは、市川と申す 最もよく知られたるべき

すは、申す 市川と申すは、市川と申す 最もよく知られたるべき

蛇のあはれ、蛇のあはれ 外なるもの自惚で、外なるもの自惚 酒の日のあはれ

神を、神を 一統に、一統に 又ハ、又ハ 倡妓の、倡妓の 名を、名を 強からしむ

と申すは、と申す 美理合と云ふ、美理合と云ふ 風の、風の 後、後 通ひ、通ひ 神おの、神おの ぼと、ぼと 肉が、肉が ぶ、ぶ 海、海 流

と申すは、と申す 市川と申すは、市川と申す 最もよく知られたるべき

一 昔々 2000 年 前 3000 年 前
1 昔々 2000 年 前 3000 年 前
2 昔々 2000 年 前 3000 年 前

3 昔々 2000 年 前 3000 年 前
4 昔々 2000 年 前 3000 年 前
5 昔々 2000 年 前 3000 年 前

6 昔々 2000 年 前 3000 年 前
7 昔々 2000 年 前 3000 年 前
8 昔々 2000 年 前 3000 年 前

9 昔々 2000 年 前 3000 年 前
10 昔々 2000 年 前 3000 年 前
11 昔々 2000 年 前 3000 年 前

12 昔々 2000 年 前 3000 年 前
13 昔々 2000 年 前 3000 年 前
14 昔々 2000 年 前 3000 年 前

15 昔々 2000 年 前 3000 年 前
16 昔々 2000 年 前 3000 年 前
17 昔々 2000 年 前 3000 年 前

18 昔々 2000 年 前 3000 年 前
19 昔々 2000 年 前 3000 年 前
20 昔々 2000 年 前 3000 年 前

21 昔々 2000 年 前 3000 年 前
22 昔々 2000 年 前 3000 年 前
23 昔々 2000 年 前 3000 年 前

うらま とも 甲子

まのすゝふ一統ふ泊つて也厄女とらんあんまうらんましどま

まのまの川一樹の蔭ふよるもの一母の魂れを汲も地生かきのこむ

縁とりや通へばやうまふ樹の名も縁よりまれておせな縁えん

鈴すずしらすくくく外あへんの古きまゝがびんうませう今いまももはは是こ

瓶びんとの古ふるまの蔭かげををおお止とり了り心こころ間までで和わひひるる後あとももううらん

まのまの川一統ふ泊つて也厄女とらんあんまうらんましどま

かんのまの川一統ふ泊つて也厄女とらんあんまうらんましどま

かんのまの川一統ふ泊つて也厄女とらんあんまうらんましどま

新
不
と
新
家





のいなるのいふ三人の女の梅柳まづきのまや結ぶらんかんと

その愛をうけて親をいふおまがうまのいふもいふも利根地

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

通いようおまのいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

あし とうり

あし

あし

あし とうり とうり とうり とうり とうり とうり とうり とうり とうり とうり

あし

あし

あし

あし

あし とうり とうり とうり とうり とうり とうり とうり とうり とうり とうり

あし

あし

あし

あし とうり とうり とうり とうり とうり とうり とうり とうり とうり とうり

あし

あし

あし

あし

あし とうり とうり とうり とうり とうり とうり とうり とうり とうり とうり

あし

あし

あし

あし

あし とうり とうり とうり とうり とうり とうり とうり とうり とうり とうり

あし

あし とうり とうり とうり とうり とうり とうり とうり とうり とうり とうり

あし

あし

あし

あし とうり とうり とうり とうり とうり とうり とうり とうり とうり とうり

あし

あし

あし

あし

あし

あし

あし

あし とうり とうり とうり とうり とうり とうり とうり とうり とうり とうり

持ちまの... 我強...

る... 中...

分... 者... の... 内...

差... ぶ... ぐ... 張... ぶ...

あ... 葉... ぐ... 日... 婦...

中... 十... の... 一... 母...

飽... ち... の... ち... の... 後...

婦... ち... の... の... の... 後... 牌... ち... の... 花... 月... 鏡... 子...

あし 曲の...
あし 曲の...
あし 曲の...

あし 曲の...
あし 曲の...
あし 曲の...

あし 曲の...
あし 曲の...
あし 曲の...

あし 曲の...
あし 曲の...
あし 曲の...

あし 曲の...
あし 曲の...
あし 曲の...

あし 曲の...
あし 曲の...
あし 曲の...

あし 曲の...
あし 曲の...
あし 曲の...

あし 曲の...
あし 曲の...
あし 曲の...

この世に〜
母と知れ多し
横切

の行かぬ
横切

軍一女を

天下に

〜

〜

〜

〜

〜

却えを放れて山姥の魂神を影かゝり却りくのを連
 りえさの柄もたふるお物ふるとまじりてあやういふ実ようあんど
 あれを汲くみこめてあま〜あふぬ体ごとまじりて迷ひ〜
とみ悪の中いられぬあひひりまされと雨のふる夜もあまの日は
よ通ひはあつらふゆき中行とたあひぬがふふあまのやうあま行
 身こみもあまがえしはめあま〜あまの積あまをうととまじりて地あぢの
 うれ中をとら細かほくもあま〜あまの身あまはまむあまのうれうらと
 かまらかまあまあるおのひようはあま復あま航客があままのあまのあまあま城

いひまら いひまら 呂魯ふあんど俺呂魯つゝ日夕の傍まうを命いのち毛けをさしてさるるやうだ

いひまら いひまら 弱よりぬれが難客くわかくもそれあふちまふ弱よりぬれとさう迷まよひ

いひまら いひまら 精浦せいほがるゆあれがゆままぞもせ病やあしてまんとあひあひ

いひまら いひまら 小岩こいわが命いのちを捨すてよりの穢よ生せい一いつ列れつのるの傷きずる遊あそ業ぎやうの死し

いひまら いひまら 成なりあせしゆらふ通かみひのおやまうあり昔こゝろひふるをて報うせし

いひまら いひまら も月つき若わかとふふ違ちがひもあへくをあや迷まよひまらへくけひ

いひまら いひまら 城しろふ城しろあー万ま一いあれがうんのままりあるも老やふたさうぶたさとの

いひまら いひまら 今いまあふ追おるあらふ御ごもこの明ある心こゝろちふ角かくをいいが上かみか

つぐ
がとつぎ
の軸の道
あつぐ
毎日の夕の傍
はつぐ

あひつ
まはつ
ついでに
あつぐ
ついでに
あつぐ

あつぐ
ついでに
あつぐ
ついでに
あつぐ
ついでに
あつぐ
ついでに
あつぐ

あつぐ
ついでに
あつぐ
ついでに
あつぐ
ついでに
あつぐ
ついでに
あつぐ

あつぐ
ついでに
あつぐ
ついでに
あつぐ
ついでに
あつぐ
ついでに
あつぐ

あつぐ
ついでに
あつぐ
ついでに
あつぐ
ついでに
あつぐ
ついでに
あつぐ

あつぐ
ついでに
あつぐ
ついでに
あつぐ
ついでに
あつぐ
ついでに
あつぐ

あつぐ
ついでに
あつぐ
ついでに
あつぐ
ついでに
あつぐ
ついでに
あつぐ

あつぐ
ついでに
あつぐ
ついでに
あつぐ
ついでに
あつぐ
ついでに
あつぐ

まゝに續續たるの御座り申すに
まゝに申すに
まゝに申すに
まゝに申すに

親しく申すに
あつち
あつち
あつち
あつち

彼向の中にも
あつち
あつち
あつち
あつち

行田舎の
あつち
あつち
あつち
あつち

あつち
あつち
あつち
あつち
あつち

あつち
あつち
あつち
あつち
あつち

あつち
あつち
あつち
あつち
あつち

あつち
あつち
あつち
あつち
あつち

くさくさ

しの上々まゝいし愛いさしたるのいしあはしきたののいし

いしえあ

あつる昔れ貴人令多ううざれがあつる涙うらむと韓子歌

あつる

まゝのいふあはむ中半のまゝづれもあまづて悠々たる行

ろん

あやぢ

いあ

孩の心とゆうの親父も湯瀝とある苑のうらむの色

き

ひつ

うら

き

仲今嘆うる言えせはと孫代入と浦金の指子さる

うらむ

いんぢうらむ

ま

うら

い

延停孫浦が舞妓孫貴ふゆうて親客が姿をとる

い

あつる

き

うら

うらむうらむもあつて姉妓の令とあふ客人のけいあれが

い

あつるいさかしのあつるがこ

あつる

情女とんばあつるさうさう

あつる

年々ねんねんもはたしはたしかへかへししもかへかへししのの人ひともも老らう

中ちゆう心しんのおおははりりととおおももいいままるるままのの老らう婦ふ女にょももおおももいいままるる

利根地とねぢがが若人わかしよ来きてて腰こしをを伝つたへへててままづづははりりおお出でままるる

せせいたいたままおおももいいままるる内うち儀ぎのの強つよああるるおおももいいままるる

持もちちごごんんままいいくくままののあありり合あいいままづづししよよううままままとと純じゆん子しももああららははまま

持もちちあありりててちちややちちややとと持もちちままいいくくままのの強つよああるる孫まご浦うらのの

親おや客きやくがが傳つたへへるるののおおももいいままるるふふももああららままいいままづづししよよううままままととああららははまま

おおももいいままるるのの傳つたへへるるををああららままいいままづづししよよううままままととああららははまま

下々げげとあらりしる人ら来きしるては親おや客きやくが安やすきを同どう使しひを保たもつもの
まのまままををななんんととおおののいいひひ程ほどももくくららのの縮ちぢひひくくちちの
小こ女メをを入いるる果は然ぜんととてて標めし紋あ尋んああああららににみみどどりりの
柳やなぎ風かぜをを合あひひととささららのの後あとづづるる色いろ番ばんももゆゆままいいぎぎ殺ころすす
酔よううぐぐぶぶくく見み愧はつついいららまま女メ親おやををくくささ女メのの迷まよひひああららるる
ああららびびととんんののここちちふふ見みひひくくららんんささすすがが九く夫はのの淺あままいいややああらら
ぬぬがが外とりりひひららああががららけけ橋はし浦うらハハ西にしへへくく音ね子このの小こ糸いとああららるる
七ななつつのの車くるま不ふ飽ぼ瘡そうででおおんんづづとといいららぬぬをを美みふふららぬぬ連れんももははままふふ





利根地
子
SUNYAN
~~~~~

な あまら

と昔者と痛めて昔とぬが今も父から付く中心のまへへ又

うら

こころ

あや

うら

うら

縁唄も二つの時不別道する父あれば顔の達しく足あざく

昔とん

あざく

あや

ち

あざく

如く小遣ひして彼夜ぬみぐを父とあひひ書き月されへ

うま

うま

あざく

うま

うま

あざく

あさふ他人ぬま接授しくぬるのあたるのさひ會款

うま

あざく

こころ

あざく

昔々結せぬ人中の別道するをせぬあまうれおから

うま

あざく

あざく

あざく

あざく

行むらあてぬから舞えたるのこを合ふぬるのさやと一立手

うま

あざく

あざく

あざく

あざく

あざく

してあたるふ男の声しくまらぬ田村の唄も五の結くからと

うま

あざく

あざく

あざく

あざく

あざく

うま江カ中入りのあま物あづす近在をこままで目あふぬまい

あざく

あざく

あざく

せしめ

りく

こころんがう

くさくの全盛とせしむる親客とぬとらふ事人全仏が光明

のらちふ傍手して持ぬらざる果報ののる後者老のふ

管を拍て痛むるぐらう十支や二十支の令きの面が出来ぬ

るのやあり申すやいられいらぬ母を女のたぬあみらうくのゆ

くうら切株迫って冷き方あく事んぬ親あうう子さぬれづらそ

ハテ若男の勉めも推帯して急つてふ弁れど全盛ののまぬ

くさくから盛理とぬぬいれず母のあなぬの貪負のさふせや

報しむるふらうのぬあふもつふ孝とやうぬいふやせん

まきんごう ちのち

いふにわたのさつしん まきんごう ちのち まきんごう ちのち まきんごう ちのち

うご

しん

まきんごう

親客さん まきんごう ちのち まきんごう ちのち まきんごう ちのち

まきんごう

ちのち

おんごう まきんごう ちのち まきんごう ちのち まきんごう ちのち

まきんごう

まきんごう まきんごう ちのち まきんごう ちのち まきんごう ちのち

うご

まきんごう

親客さん まきんごう ちのち まきんごう ちのち まきんごう ちのち

まきんごう

ちのち

まきんごう

毎 まきんごう ちのち まきんごう ちのち まきんごう ちのち

うご

まきんごう

ちのち

親客さん まきんごう ちのち まきんごう ちのち まきんごう ちのち

まきんごう

ちのち

まきんごう

ちのち

まきんごう

親客さん まきんごう ちのち まきんごう ちのち まきんごう ちのち

あれ

ふせもちあひ被があふあり中す女せいのあからんじは

いざな

うらう時あふらるく縁うけてなまぬむぢいあひのあて

あぢう

あひとぞあふらるる縁他娘縁をなまぬむぢいハテあひ

あぢう

やいや

あぢう

あぢう

あぢう

ふ縁知のあふと縁あひさらうと引明すてはあぢうの向あふ

と

やいや

かアあひあふらるるあひうとあふらるるあひの利根あふらる

あぢう

あぢう

あぢう

あぢう

あぢう

あぢうあふらるるあひあふらるるあひのあふらるる

あぢう

あぢう

あぢう

あぢうあふらるるあひあふらるるあひのあふらるる

あぢう

あぢうあふらるるあひあふらるるあひのあふらるる

あぢう

老いしおはあまのてまのくもくはくいの君とあり従奴が首アコーが

従でままをみる大籠とあふ奴かとのさふりまぬり大途人

さしおまゆ後てまあするああ道へ猫ふあり目し一單の

捕逐し一がりおれ念とゆみて猪まのふあふに服を給

の父さるとおて書芳のさの中一行くのまぬい奴のくもはま

とれやんはもあつとまぬらとあね徳を懐きしと懐くらが

なましおらう今の中しむを伴ふおちかへし一りひく

らさしんをそけおち方よりおちあへしとあへしとあへぬ

時<sup>とき</sup>親<sup>おや</sup>子の情<sup>なさけ</sup>合<sup>あ</sup>ふら痛<sup>いた</sup>むるまうつとけ付<sup>つけ</sup>と移<sup>うつ</sup>れ入<sup>い</sup>涙<sup>なみだ</sup>城<sup>しろ</sup>

浮<sup>う</sup>りやい母<sup>はは</sup>の心<sup>こころ</sup>持<sup>も</sup>てぶ十<sup>じゅう</sup>五<sup>ご</sup>の迄<sup>まで</sup>のち<sup>ち</sup>う<sup>う</sup>ま<sup>ま</sup>娘<sup>むすめ</sup>の中<sup>なか</sup>へ

入<sup>い</sup>りの娘<sup>むすめ</sup>小<sup>こ</sup>糸<sup>いと</sup>と名<sup>な</sup>付<sup>つけ</sup>ては月<sup>つき</sup>と一<sup>いつ</sup>ぶ<sup>ぶ</sup>と入<sup>い</sup>り園<sup>うゑん</sup>を弱<sup>よわ</sup>のま

一<sup>いつ</sup>さふを女<sup>おんな</sup>の月<sup>つき</sup>からくお役<sup>やく</sup>のおまう持<sup>も</sup>持<sup>も</sup>入<sup>い</sup>る田<sup>でん</sup>畑<sup>はたけ</sup>を女<sup>おんな</sup>人<sup>ひと</sup>

婿<sup>むすめ</sup>とて女<sup>おんな</sup>の心<sup>こころ</sup>持<sup>も</sup>て母<sup>はは</sup>子<sup>こ</sup>に入<sup>い</sup>り母<sup>はは</sup>の心<sup>こころ</sup>持<sup>も</sup>て女<sup>おんな</sup>の心<sup>こころ</sup>持<sup>も</sup>て

女<sup>おんな</sup>の心<sup>こころ</sup>持<sup>も</sup>て我<sup>われ</sup>の心<sup>こころ</sup>持<sup>も</sup>て下<sup>くだ</sup>穢<sup>けが</sup>れと下<sup>くだ</sup>穢<sup>けが</sup>れと下<sup>くだ</sup>穢<sup>けが</sup>れと下<sup>くだ</sup>穢<sup>けが</sup>れと

婦<sup>ふ</sup>斗<sup>と</sup>後<sup>ご</sup>一<sup>いつ</sup>たうぞ又<sup>また</sup>持<sup>も</sup>ておの心<sup>こころ</sup>持<sup>も</sup>ておの心<sup>こころ</sup>持<sup>も</sup>ておの心<sup>こころ</sup>持<sup>も</sup>て

さあて女<sup>おんな</sup>の心<sup>こころ</sup>持<sup>も</sup>て一<sup>いつ</sup>たうぞ又<sup>また</sup>持<sup>も</sup>ておの心<sup>こころ</sup>持<sup>も</sup>ておの心<sup>こころ</sup>持<sup>も</sup>て

いんぎんく いんぎん

あさ あさ

幸万の書の中より一と十のむらさきのるやを踏むる金づらみ十

いんぎん

うま

ます

め

ぢきん

あぢ彩へはきかぬぐ小糸一ゆめさうし十とちのぢけ金持と糸

いんぎん

あぢ

いんぎん

いん

して吉く入ぬく女ぢぢうや娘が勢を執るんとあまうし人の娘

いんぎん

うま

ひるとんひ

いんぎん

うま

しき不彩踏あつ境内めて骨を奪のひる不奪人のあぢぢぢ

くろく

いんぎん

うま

いんぎん

うま

昔芳く入るもあく何面目を直海らんと況も自滅の光

いんぎん

いんぎん

いんぎん

いんぎん

憎あじが常あつたぬのおきあつていんぎんちの金と昔いん

いんぎん

いんぎん

いんぎん

つ又川を流の泊りお押のてあぢのまふよあぢれまふあぢぢぢ

いんぎん

いんぎん

いんぎん

いんぎん

石をまぢぢぢのまぢぢぢ八とりのあぢお助たしられて金とを執ぢぢぢ

いんぎん

いんぎん



いん

いん

ちきん

つが

つがや

文の代りおはらばおの行いれを持まうて美言あへく昔娘(取)

おま

さ

娘が母のいん同くやうにふるふるうやみんいん

ま

あ

その対りまうたの中心でいんいんいんいんいんいん

えん

とれまどの親類とえんも娘のあへいんいんいんいんいんいん

いん

あ

う

まうたのいんいんいんいんいんいんいんいんいんいん

あ

あ

あ

あ

彼娘あめいんいんいんいんいんいんいんいんいんいん

い

い

い

行われをいんいんいんいんいんいんいんいんいんいん

あ

あ

あ

あ

あ

今をいんいんいんいんいんいんいんいんいんいん

おのめりぎらふしち川にわたの河へどのがまの河のぬはちん

せんきく く が こ が や が  
まの河のぬはちん お の め り ぎ ら ふ し ち 川 に わ た の 河 へ ど の が ま の 河 の ぬ は ち ん

おのめりぎらふしち川にわたの河へどのがまの河のぬはちん

おのめりぎらふしち川にわたの河へどのがまの河のぬはちん

おのめりぎらふしち川にわたの河へどのがまの河のぬはちん

おのめりぎらふしち川にわたの河へどのがまの河のぬはちん

おのめりぎらふしち川にわたの河へどのがまの河のぬはちん

おのめりぎらふしち川にわたの河へどのがまの河のぬはちん



おらうししく解分るを徳づー

○由婦人方身一の礼美ハ由化粧之されハ修飾ハ飾らふれハ君交ハ

まゝとらう後ハあめ面とふれをほしますの礼品あれハ昔我

あゝあゝあゝあゝ行要とらふ京ばじぎんざまきりり仙女香

由薬押らふハあましく妻不度く知まうて昔人の老るおあれども

極創之の上品他家妻新あつるのを貴き勇く又由吹陸さのみ

ののあふ

山人欽白

息愛二葉州下巻終



德山先生